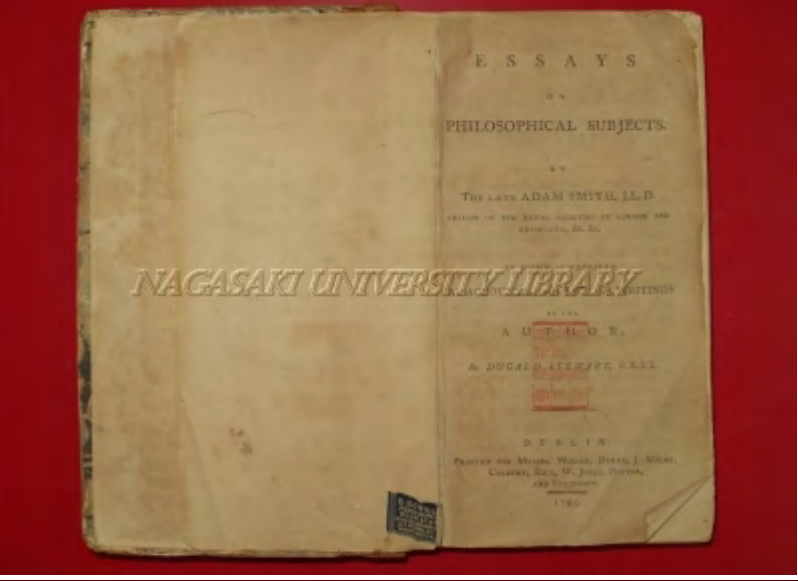
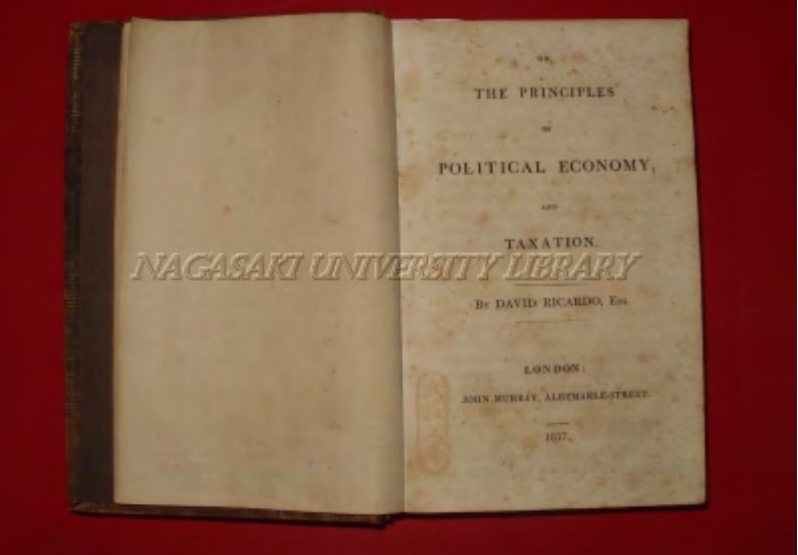
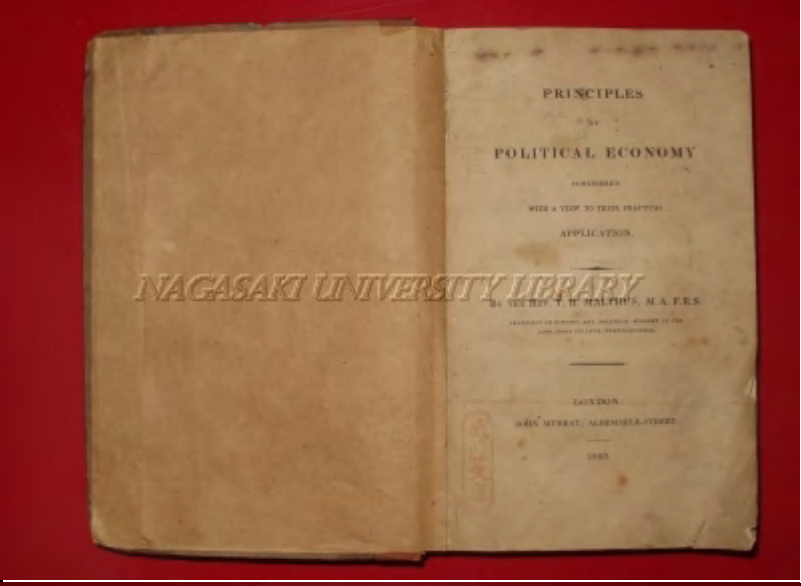
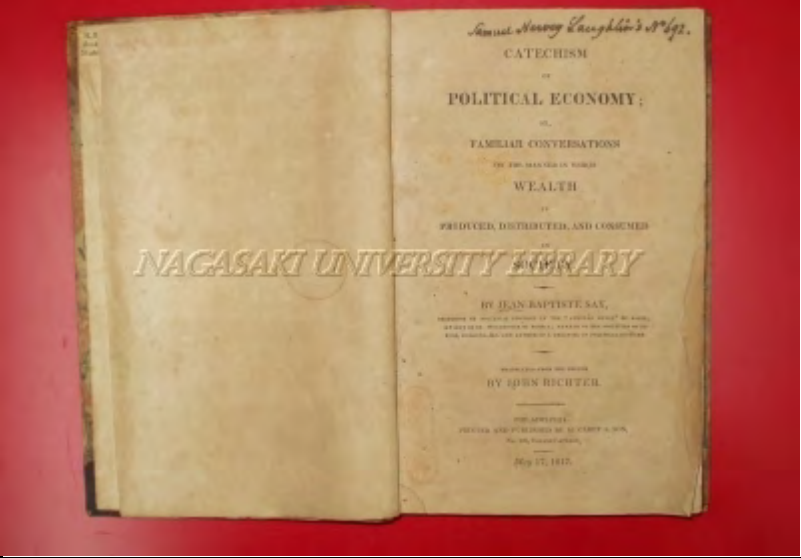


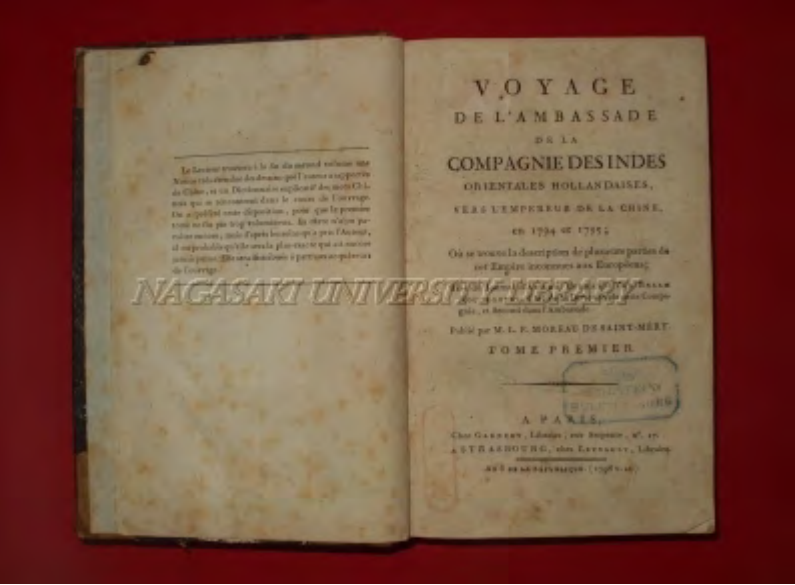
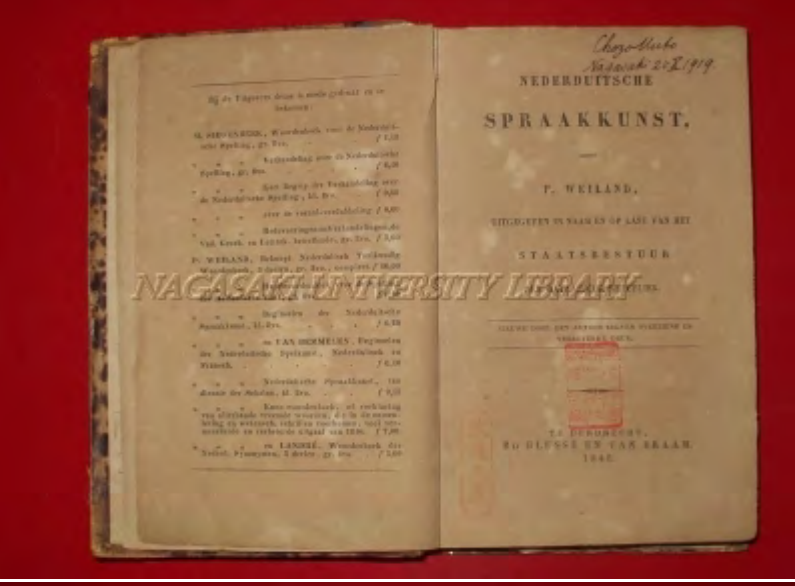
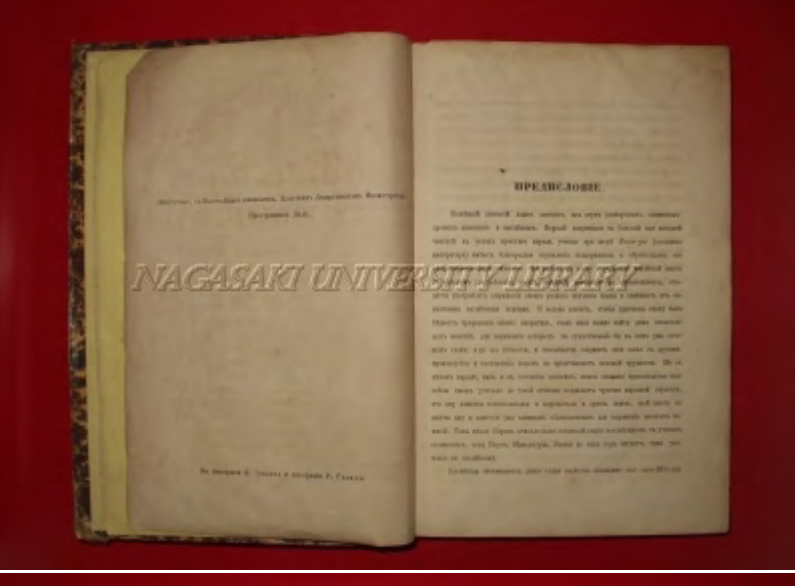
■経済学関係の古典

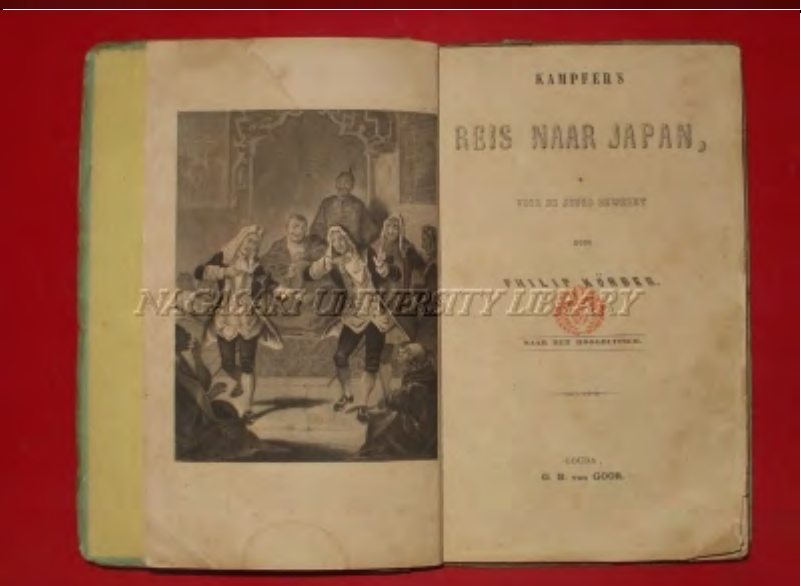
No.	資料名（タイトルをクリックでOPAC画面へ）	画像（クリックで詳細）	画像
1	ジョサイア・チャイルド『貿易論』	ロンドン 1690年刊 Sir Josiah Child, A Discourse about Trade. チャイルド(1630－1699)は、17世紀のイギリスの大実業家で重商主義の理論家。のちにイギリス東インド会社の総裁となり、大胆な政策で同社の富を増した。本書は英国重商主義政策の先駆的書物ともいうべきものである。	
2	ジョサイア・チャイルド『新貿易論』(第4版)	ロンドン 刊年不明 Sir Josiah Child, A New Discourse of Trade. 『貿易論』を増補改題したもの。出版年等が不明であるが、それについて福田徳三博士と武藤博士との間に論争が行われ、当時の学界を賑わした。	
3	アダム・スミス『国富論』第1、2巻(初版)	ロンドン 1776年刊 Sir Josiah Child, A New Discourse of Trade. それまで哲学の一分野としてしか扱われていなかった経済的論題を体系的に論じた最初の経済学の体系的著作。アダム・スミス(1723－1790)はイギリス(スコットランド)の経済学者、哲学者。グラスゴー大学で哲学者ハッチソン(F.Hutcheson.1694－1747)に学び、その道徳哲学から大きな影響を受けた。グラスゴー大学の教師を経てバックルー公(Henry Scott, 3rd Duke of Buccleuch,1746-1812)の家庭教師となり、1764年にはバックルー公とともにフランスに渡り、ケネー(F.Quesnay.1694－1774)を指導者とする重農主義者から大きな影響を受けた。帰国後は郷里に帰り、バックルー公からの年金をうけて著作に専念し、経済学上最大の古典の一つとされる本書を公刊した。	
4	アダム・スミス『哲学論文集』(初版)	タブリン 1795年刊 Adam Smith, Essays on Philosophical Subjects. アダム・スミスがグラスゴー大学で教鞭をとって間もない時期に執筆されたと思われる哲学論文集。アダム・スミスは未定稿が世に残ることを好まず、その大部分は焼却されたが、本書は焼却を免れて公刊されたものである。	
5	リカード『経済学および課税の原理』(初版)	ロンドン 1817年刊 David Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation. リカード(1772－1823)はイギリスの経済学者で、穀物の自由輸入の利益を主張、マルサスなどの穀物輸入制限論者を反駁し、穀物条例改正問題について論争した。本書の執筆によって論争の原理的基礎を与えるとともに、古典派最大の経済学者としての地位を確立した。本書はリカードの経済学上の主著であるとともに、古典派経済学の完成を告げる不朽の名作といわれている。	
6	マルサス『地代論』(初版)	ロンドン 1815年刊 T. R. Malthus, An Inquiry into the Nature and Progress of Rent. マルサス(1766－1834)はイギリスの経済学者、特に『人口論』は有名であり、また差額地代論や恐慌論でもよく知られている。	

7	マルサス『人口論補遺』(初版)	ロンドン 1817年刊 T. R. Malthus, Additions to the Fourth and Former Editions of an Essay on the Principles of Population.	
8	マルサス『経済学原理』(初版)	ロンドン 1820年刊 T. R. Malthus, Principles of Political Economy. リカードの『経済学および課税の原理』の刊行に刺激されて出版されたもので、リカードの立場を論破するために著された。	
9	ヴォーバン『王室十分の一の税』	パリ 1707年刊 Marechal de Vauban, Projet D'une Dixme Royale. ヴォーバン(1633-1707)は17世紀フランスの工兵技師、経済学者。攻城、築城術の第一人者で、「ヴォーバンが攻囲した町は必ず落ち、ヴォーバンが要塞を築いた町は絶対に落ちない」といわれた。本書はヴォーバンの晩年の著作で、下層民の負担軽減、課税の平等を説いたもので、重農学派の先駆として有名である。本書は支配者階級の怨みを買い、ルイ14世は本書の焼却を命じた。	
10	セイ『経済学問答書』(英訳本)	フィラデルフィア 1817年刊 Jean-Baptiste Say, Catechism of Political Economy. セイ(1767-1832)はフランスの自由主義経済学者で、一般的過剰生産を否定する「販路説」で有名である。	

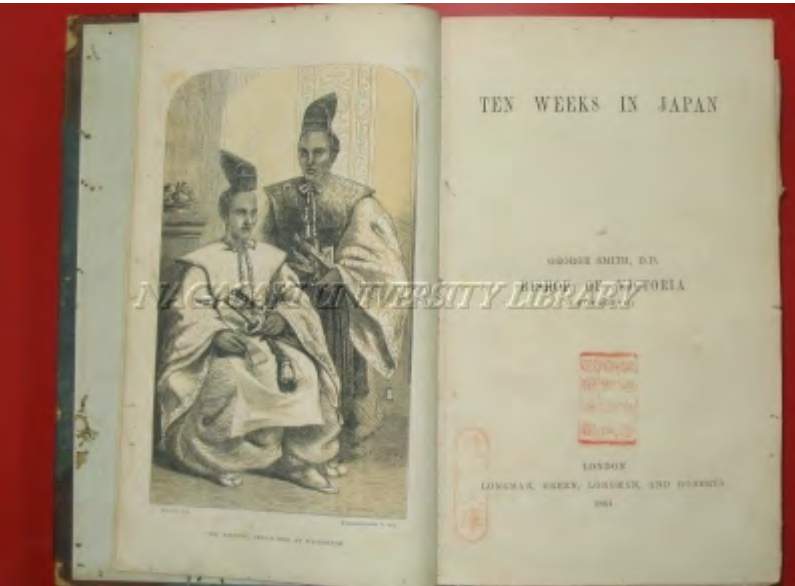
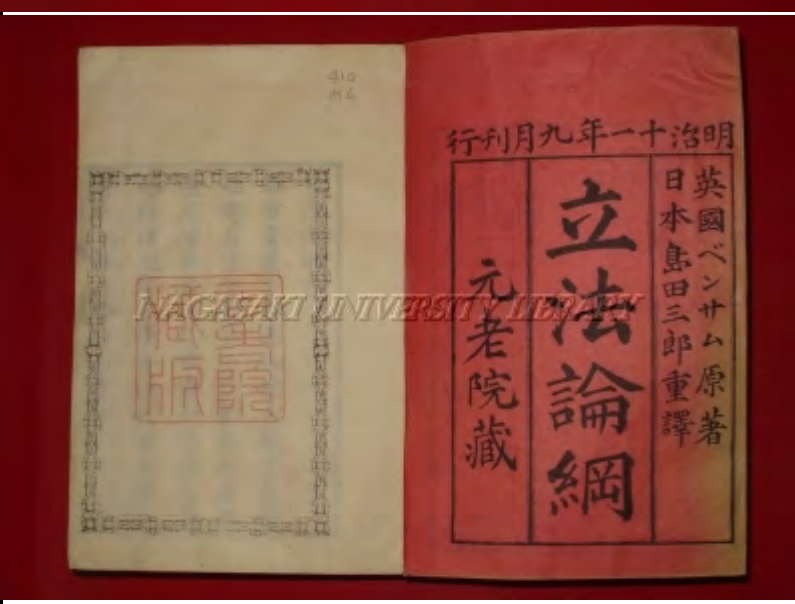
■ 対外交渉史資料

11	マルティニウス『韃靼支那戦記』(英訳)	ロンドン 1654年刊 M.Martinius, Bellum Tartaricum, or the Conquest of the Great and most renowned Empire of China. マルティニウス(1614-1661)はオーストリアのトリエント生まれのイエズス会士で、1643年に中国に渡り各地を遍歴した。途中ローマに派遣され、1653年に再び中国に入り、一生を伝道に捧げた。本書は明の滅亡、清の覇業を見聞したまま記録したもので、貴重な資料として世界各国語に翻訳された。	
12	リチャード・ペーカー『英国王年代記』	ロンドン 1674年刊 Sir Richard Baker, A Chronicle of the Kings of England. ペーカー(1568-1644)は英国の歴史家で、本書の構成は20余年にわたる獄中生活の間にできたものである。	

13	マカートニー『英国特命公使支那紀行』(仏訳)	パリ 1798年刊 Lord Macartney, Voyage dans l'interieur de la Chine et en Tartarie. マカートニー伯(1737－1806)はアイルランドのベルファストに生れたスコットランド人で、1764年に通商条約締結の特命使節としてロシアに派遣されたのをふり出しに、グラナダ、マドラス等の知事をつとめた。1793年にイギリス政府の最初の使節として中国に派遣されたが、通商条約締結の目的を達せられないまま帰国した。本書は当時の英中交渉資料として貴重である。	
14	ファン・ブラーム『和蘭東印度会社使節支那宮廷派遣記』	パリ 1798年刊 Andre Enerard Van-Braam, Voyage de l'Ambassade de la Compagnie Desindes. Orientales Hollandaises, vers l'empereur de la chine, en 1794 et 1795. ファン・ブラーム(1739年生)はオランダ人で、1758年に中国に赴き、オランダ東インド会社に入ってマカオおよび広東に住んだ。中国語に精通し、1793年東インド会社の使節副使として北京に赴き交渉に成功、1795年に広東に帰った。本書はブラームの日記および覚書を、モロー・ド・サンメリー(1750－1819)というオランダ人(パルマとピアセンザの知事)がまとめて刊行したもので、観察の精密的確な点で大いに尊重された。原版はフランス語。	
15	ウエイランド『オランダ語文法』	ドルドレヒト 1846年刊 P. Weiland, Nederduitsche Spraakkunst. 開国当時のわが国の蘭学者たちがオランダ語の入門書として広く利用した本で、安政3年(1856)と安政6年(1859)には長崎でも出版された。本書は金属活字で印刷された原本である。シーボルトの娘おいねは、シーボルト事件で帰国した父シーボルトから送られたこの本でオランダ語を勉強したといい、おいねの手沢本は子孫の楠本家に残されているという。	
16	パイル『英文典初歩』(蘭語)	長崎出島 安政4年 Van der Pijl's, Gemeenzame Leerwijs, voor Degenen, die de Engelsche Taal Beginnen te Leeren. ファン・デル・パイルの原著(ドルドレヒト、1854年刊)を、安政4年(1857)に長崎出島で日本人が複製した英文典。オランダ語による英語学習の初歩の本で、オランダ語と英語とを対照して示している。鉛活字を用いて印刷されたわが国で最初の英文典と言われている。	
17	ゴシケヴィッチ、橋耕齋編『和魯通言比考』	ペテルブルク 1857年刊 Русско-японск?й словарь = 和魯通言比考。 嘉永6年(1853)に来日したロシア使節ブチャーチンの中国語通訳官ゴシケヴィッチが、橋耕齋(1820－1885)の協力を得て編纂した世界で最初の日露辞書。日本語をカタカナと漢字でイロハ順に記し、ロシア語訳を掲げている。橋耕齋(1820－1885)はもと掛川藩士で、ゴシケヴィッチの手引きで日本を密出国し、ロシア外務省の翻訳官として採用された。	
18	堀達之助編・堀越亀之助補『改正増補英和对訳袖珍辞書』	江戸 慶応2年(1866)刊 A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language. 文久2年(1862)に洋書調所から刊行された『英和对訳袖珍辞書』を、慶応2年(1866)に開成所から増補刊行したもの。『英和对訳袖珍辞書』は、H.ピカードの『新ポケット英蘭蘭英辞典』(A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages)のオランダ語の部分を日本語に置き換えたものである。	

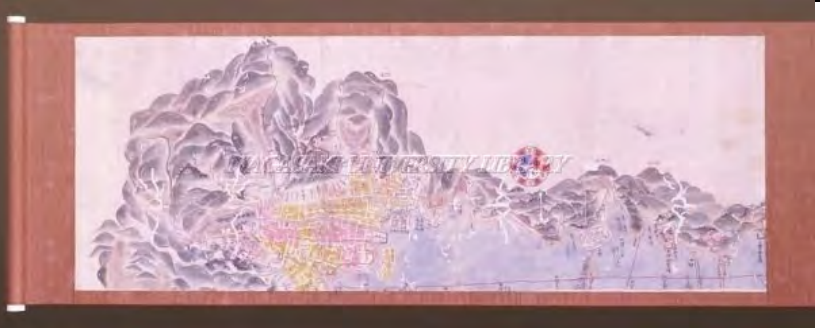
19	ロドリゲス『日本通信、1609-1610』	ローマ　1615年刊 Giouan Rodrigues Girano, Lettera Annva del Giappone Del 1609.e 1610. ロドリゲス(1558－1629)はポルトガルのイエズス会宣教師で、天正14年(1586)わが国に渡来し、豊後、大村、有馬、京都で宣教に従事した。慶長8年(1603)に長崎のイエズス会本部に来て副管区長の書記を勤めたが、同19年(1614)の大追放によりマカオに渡り、同地で没した。日本語に熟達し、日本語で説教を行なったという。本書は日本における布教、コレジオ等の状況を本国に報じたものである。	
20	『忘却された台湾』	アムステルダム　1675年刊 ‘t Verwaarloosde Formosa. 著者名はC・E・Sとなっているが、これは出島蘭館長だったF・コイエット(F.Coyett,1615頃－1674)およびその同僚の略名である。コイエットは正保4年(1647)から前後2回長崎出島オランダ商館長として来日。その後1656年に台湾長官となったが、1662年鄭成功の来攻に降服、30年にわたる台湾のオランダ人統治を放棄した責任で、終身流刑に処せられた。のちに許されて帰国。本書はコイエットの同僚等が匿名で台湾放棄の止むを得なかったことを綴ったものである。	
21	ケルベル『ケンペルの日本旅行記』	ハウダ　刊年不詳 Philip Korber, Kampler's Reis Naar Japan. ケンベル(Engelbert Kaempfer,165－1716)の『日本誌』(The history of Japan,1727)をケルベルがまとめて編集したもの。ケンベルはドイツの博物学者、医者、日本研究者。諸方を遊歴し、ベルシャでオランダ東インド会社の医官となり、元禄3年(1690)長崎に来航、元禄5年(1692)まで滞在し、その間、商館長の江戸参府に随行した。本書は出版年は記されていないが、18世紀前半頃の出版と思われる。この本の巻頭に、将軍綱吉の前でケンベルが踊っている絵が掲げられている。	
25	シーボルト『日本旅行記』全3巻(仏語版)	パリ　1838年刊 Philipp Franz von Siebold, Voyage au Japon.	
26	シーボルト『日本よりの公開状』	長崎出島　1861年刊 Philipp Franz von Siebold, Open Brieven uit Japan. シーボルトが日本の貨幣、海軍伝習、桜田門事件について本国の友人へ書き送ったもの。長崎出島のオランダ印刷所で刊行された金属活字本で、日本でも稀観のものといわれている。表紙裏に「著者より」という文字が書かれており、シーボルトからオランダ（またはドイツ）の貴族に贈呈されたものと思われる。	
27	シーボルト『日本動物誌』4冊(覆刻版)	植物文献刊行会　昭和9年 Philipp Franz von Siebold, Fauna Japonica. シーボルトが日本滞在中（1823－1829年）に採集した動物標本や、川原慶賀などの日本人絵師に描かせた下絵をもとにまとめられたもので、原書は1833年から1850年にわたって分冊刊行された。日本の動物について欧文で記された最初の書物である。	

28	シーボルト『日本』5冊	ベルリン　1931年刊 Philipp Franz von Siebold, Nippon. シーボルトが日本での調査をもとに著した、日本とその周辺地域に関する学術調査書。地理・歴史・国家制度・経済・文化などについて詳しく記している。テキスト編と図版編からなり、1832年から1858/1859年まで14回に分けてオランダのライデンで出版配本された。		
29	伊藤圭介著『泰西本草名疎』3冊	花繞書屋蔵板　文政12年(1829)刊 シーボルトから贈られたツンベルグの『日本植物誌』（Flora Japonica,1784）をもとに学名と和名を対照して示し、リンネ(Carl von Linne,1707～1778)の24綱分類体系を訳述付録として刊行したもの。伊藤圭介(1803-1901)は、幕末・明治時代の本草学者、植物学者。名古屋の医者西山玄道の次男として生まれ、京都で洋学を修めたのち、長崎に遊学してシーボルトに学んだ。その後、蕃書調所などに仕え、維新後は東京大学に迎えられ、明治21年(1888)わが国最初の理学博士となった。上および附録に「松平確堂蔵書」の印がある。確堂は津山藩主松平(越前)家8代である松平齐民(1814-1891)の号。上の巻末には「英人C.R.ボクサー君より□□　昭和六年於東都　武藤長蔵」と墨書されている。		
30	川原慶賀画、川原廬谷校『草木花実写真図譜』2巻4冊	大阪・前川善兵衛刊　明治初期 天保7年(1836)に刊行された『慶賀写真草』の改題再刊本。川原慶賀(1786－没年不詳)は長崎の絵師。出島への出入を許され、シーボルトの求めに応じ多くの植物画、肖像画、風俗画を描いた。本書は身近で見かける植物を写実的に描いた多色刷りの木版本。1、2冊目が草部、3、4冊目が木部で、草部には忍冬(スイカズラ)など27種、木部には木瓜(モケ)など29種を収め、絵図の傍らに洋名を記し、その解説や薬効を記している。		
31	鳴滝塾舎之図　成瀬石痴画	鳴滝塾は、シーボルトが文政7年(1824)に長崎市外鳴滝に設けた診療所兼学塾で、西洋医学および一般科学の教授を行なった日本最初のヨーロッパ系学塾である。本画は長崎の画家、成瀬石痴(1838－1895)が描いたもので、鳴滝塾の実景を伝えるわが国唯一の資料である。		
32	長崎出島之図　川原慶賀画	川原慶賀(1786－没年不詳)は出島オランダ商館絵師で、シーボルト来日後は御用絵師としてシーボルトに愛され、その肖像画や日本植物の図を描いて、大著『日本』等の著述を助けた。本図は出島の全景を描いたもので、本図とほとんど同一の図(署名入り)がドイツのマンハイム市にある市立マンハイム城博物館に所蔵されている。		
33	オランダ人夫婦相愛の図　松井硯山画	松井硯山(1785－1819)は長崎の画家松井霞山の子、慶仲と号した。司馬江漢の門人で、洋学を能くし、特に彩色に優れていた。画面上に吉雄権之助自筆のオランダ語の賛が書かれている。吉雄権之助(1785－1831)はオランダ通詞吉雄耕牛の末子で、オランダ語に熟達し、鳴滝塾の門人たちにオランダ語を指導して、シーボルトの事業を助けた。		

34	ジョージ・スミス『日本における10週間』	ロンドン　1861年刊 George Smith, Ten Weeks in Japan. スミス(1840－1876)はイギリスの宣教師で、万延元年(1860)に長崎に来遊、約1か月間滞在して、シーボルト、ポンペ、オランダ商館長クルチウス等とも会談した。長崎の諸般の事情を観察後、海路神奈川に至り、横浜、江戸を廻って帰国した。本書は、その日本見聞記である。	
35	ポンペ『日本における5年間』第2巻	ライデン　1868年刊 Pompe van Meerdervoort, Viff Jaren in Japan.1857-1863,Tweed Deel. ポンペ(1829－1908)はオランダの軍医で、教育派遣隊の一員として安政4年(1857)に長崎に着き、医学、理学の教育に務め、わが国最初の西洋近代式の病院を開いた。本書は、ポンペの日本滞在記であるが、第1巻を欠いている。巻頭に当時の長崎医学伝習所が着色版で掲載されている。	
36	「英艦イカルス号航海日記」	1867-1868年 A Log-Book of H.M.S.Icarus, 1867. 1867年11月3日から1868年4月22日までの長崎から函館を経由して横浜に至る英国軍艦イカルス号(H.M.S.Icarus)と、1868年5月9日から12月10日までの日本でのオーシャン号(H.M.S.Ocean)の航海日記。2艦を乗り継いだ船長の日誌を製本し、白革で表装している。巻頭に瀬戸内海を航行中のイカルス号の水彩画が掲載されている。	
37	サトー『源氏(元治)夢物語』	東京　1905年刊 Ernest Mason Satow, Japan 1853-1864, or Genji Yume Monogatari. サトー(1843－1929)はイギリスの外交官。文久2年(1862)横浜に来航、横浜領事館付日本語通訳官となり、明治16年(1883)にいったん帰国するが、明治28年(1895)に駐日公使として再び来日した。幕末・維新を通じて公使パークスのもとで外交官として活躍する一方、日本各地を旅行し、日本の実情に通じた。日本におけるイエズス会の事業を調査し、これに関する多くの著書を出した。	
38	中村敬太郎訳『自由之理』5巻6冊	駿河静岡・木平謙一郎版　明治5年(1872)刊 ミル(John Stuart Mill,1806－1873)の『自由論』(On Liberty,1859)の翻訳。巻頭に静岡学問所のクラーク(Edward Warren Clark,1849-1907)の英文の序がある。自由民権運動に大きな影響を与えた。	
39	島田三郎訳『立法論綱』4巻	元老院蔵　明治11年(1878)刊 デュモン(Pierre Etienne Louis Dumont,1759－1829)がベンサム(Jeremy Bentham,1748-1832)の草稿を編纂して、1802年にフランス語で出版した『立法論』(Traites de Legislation civile et penale)の一部を英訳から重訳したもの。何礼之訳『民法論綱』(1876年)、林薫訳『刑法論綱』(1877－79年)と合わせて全訳となる。	

40	神田孝平訳『経済小学』2巻	東京 紀伊国屋源兵衛・神田氏蔵版 慶応3年（1867）刊 幕末から明治に活躍した洋学者、神田孝平(1830－98)がイギリスのエリス(William Ellis)の『経済小学』をオランダ語から重訳したもの。わが国に西洋経済学の全体像を初めて紹介した書物といわれる。	
41	福地源一郎訳『官版 会社弁』	大蔵省 明治4年(1871)刊 欧米の会社制度、特に株式会社制度の、我が国への導入を図っていた明治政府が、欧米の経済書中の会社篇等の要項を福地源一郎に抽出翻訳させて、明治4年(1871)に大蔵省から発行したもので、当時大蔵省に在籍していた渋沢栄一が序文を書いている。わが国における会社制度知識普及の嚆矢となった書物として有名である。	
42	V O Cマーク入染付平皿	文政頃(1818-1829年) V O Cはオランダ東インド会社(Vereenigde Oost-Indische Compagnie)の略名。文政頃(1818－1829)の伊万里焼。日本で焼いた陶器がオランダに輸出され、それが再び日本に伝来したものであろう。	
43	英国製蒸気車絵入皿		
44	スープ皿（デルフト焼）	嘉永年間(1848-1853)	
45	媽祖像	木製 媽祖は南部の沿海地域を中心に民間で信仰された女性神。航海安全や安産の神とされ、船に祀って、航海の無事を祈った。本像は長崎県五島で武藤博士が発見されたものである。	

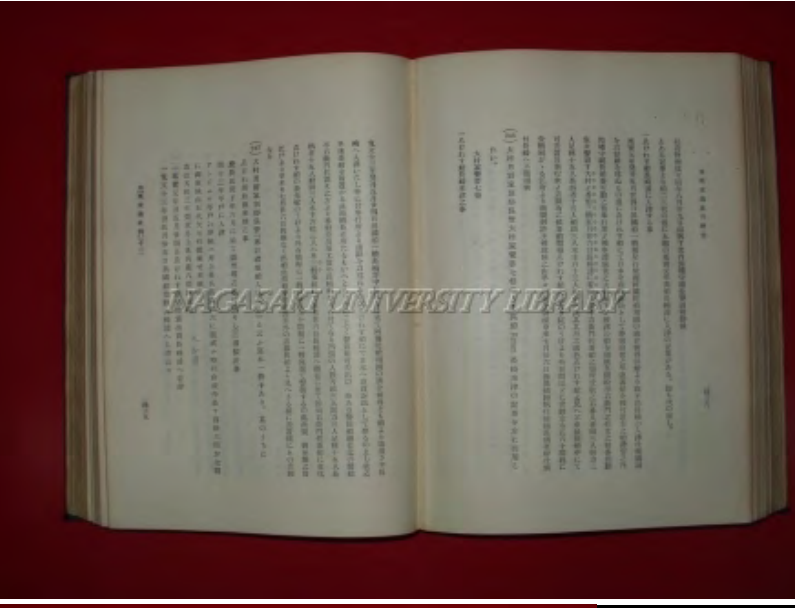
■近世長崎関係資料

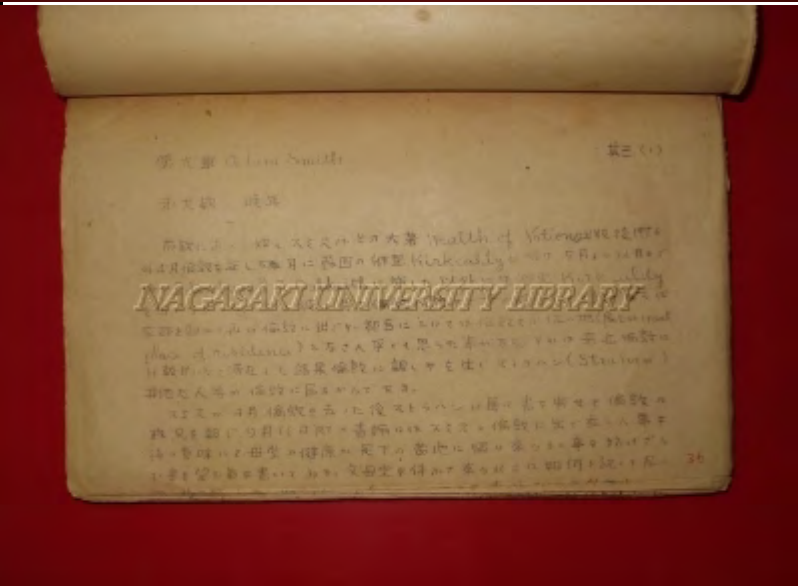
46	長崎港之図	天保年間(1830-43)	
49	立山御屋敷の図	長崎奉行所は、江戸町(西役所)と立山(立山役所)の2か所にあった。立山役所	
50	唐船図（長崎版画）	長崎版画は長崎で作られた版画の総称で、18世紀中頃に始まり、天保(1830－	
51	唐船来於崎海（長崎版画）	長崎に入港した唐船の乗組員が、航海安全の守り神である媽祖像を唐寺へ預	
52	阿蘭陀船図（長崎版画）	大和屋板 元来は「唐船図」と一つながりの「唐船図阿蘭陀船図」を切り離したものと 思われる。	
53	阿蘭陀船入津之図(長崎版画)	長崎勝山町・文錦堂板 寛政12年(1800)	

54	萬国旗 文政年間(1818－29)	文政年間(1818－29) 長崎に入港する外国船の国籍などを判別するために作成された旗の図。長崎奉行から外国船の旗とその立て方などについて尋ねられたオランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ(Jan Cock Blomhoff)は、旗の図および諸規定について記した報告書を提出し、オランダ通詞吉雄権之助がそれを日本語に翻訳しているが、これもそれと関連するものと思われ、巻頭にブロムホフらしい人物が描かれている。	
56	魯西亜国蒸気船	ペリー(M.C.Perry,1794～1858)が浦賀に来航した1か月半後の嘉永6年(1853)7月18日、プチャーチン(E.V.Putiatin,1803－1883)が率いるロシア艦隊4隻が長崎に入港した。図は4隻のロシア艦隊のうち唯一の蒸気船であったウォストーク号を描いたものである。	
58	プチャーチン一行の図	ロシア国旗を先頭に楽隊、儀仗兵、士官が進み、そのうしろに赤い箱に入った国書と使節プチャーチン（下図前から4番目の人物と思われる）および随員が続き、最後に使節らが座る椅子を抱えた3人が従っている。国書を呈上するため、初めて長崎に上陸した8月19日の行列を描いたものであろう。	
59	唐人屋敷の図	宝暦年間(1751-63) 元禄2年(1689)に設置された唐人屋敷の風景を描いた図。巻物仕立てであったものを切り離して額装にしたもの。「阿蘭陀商館の図」と対になるものであろう。	
60	阿蘭陀商館の図	宝暦年間(1751-63) 出島のオランダ商館を描いた図。巻物仕立てであったものを切り離して額装にしたもの。「唐人屋敷の図」と対になるものであろう。	
61	オランダ船ヨリ連渡象の図（長崎版画）	文化10年(1813)に幕府への献上物として連れて来られた象を描いたもの。	
62	広東十三行の図	幕末 中国製 中国・広東にあった欧米商館を描いたガラス絵。広東十三行とは、清朝の外国貿易を独占していた官許商人(中国商人)である「洋貨行」「洋行」の通称であったが、のちに「洋行」が外国商社を指すようになり、「広東十三行」も広東にあった欧米商館を指すようになった。ガラス絵はガラスの裏面に淡水または油で絵を描き、その上にわら紙を貼って表側から見るようにしたものである。	

63	長崎出島旧地図	明治元年(1868) 画面上に「Plan of Decima Nagasaki 1st November 1868」と記されている。建造の素材形式などが色別に示されている。出島の扇形が画面の下になっているが、これは開国後の出島図の特徴である。	
65	大浦居留地之図	明治10年-明治14年(1877-1881) 大浦と東山手の居留地を描いた地図。右下に“Plan of Oura and Oura Hills, Nagasaki”と記されている。長崎の居留地は安政6年（1859）から建設がはじまり、条約が改正される明治32年(1899)まで存続した。画面左下に明治9年(1876)3月に完成した長崎税関が描かれ、中央部の空き地に明治15年(1882)6月に落成した活水女学院のラッセル館が描かれていないことから、この地図はその間に作成されたものと思われる。長崎居留地の地図は、ふつう東山手・大浦と南山手・浪の平の地図が対になっているが、武藤文庫には東山手・大浦の地図のみ所蔵されている。	
66	天保十五年阿蘭陀国使節兵船来入長崎津の肥前鍋島侯筑前黒田侯陣営図	天保15年(1844)年7月2日、オランダの軍艦パレンバン号が国王ウイレム2世の開国を勧告する国書を持って長崎に来航した。入港したのがいつもの商船ではなく大きな軍艦であったため、警備にあたった佐賀藩と福岡藩は厳重な警戒体制を敷いた。このとき佐賀藩主鍋島直正は、パレンバン号に乗り込んで艦砲の操作や銃陣の訓練を視察し、西洋軍事力の導入の必要性を痛感したという。	
67	長崎新地絵図	元禄15年（1702）に海を埋め立てて造成された新地蔵所を描いたもの。唐船の荷物を収納した。1番から4番までの水門を有し、荷物運送のときはここから出し入れをした。現在の新地中華街（新地町）に当たる。	

■ 武藤長蔵博士関連

68	武藤長蔵『日英交通史之研究』	武藤長蔵博士の著書 内外出版印刷株式会社 昭和12年(1937)刊	
----	--------------------------------	--	---

69	武藤長蔵『A SHORT HISTORY OF ANGLO-JAPANESE RELATIONS』	武藤長蔵博士の著書 The HOKUSEIDO press 1936年刊	
70	武藤長蔵博士の論文抜刷	武藤長蔵博士の日独文化講演会講演 『日独文化講演集 シーボルト記念号』に掲載されたものの抜刷	
71	武藤長蔵博士の講演速記録	武藤長蔵博士の日独文化講演会講演の速記録	
72	武藤長蔵博士の原稿	武藤長蔵博士の原稿 坂西由蔵博士還暦祝賀論集『経済学史の諸問題』寄稿	
73	武藤長蔵博士の講義ノート	武藤長蔵博士の講義ノート 第26回卒業生吉開治彦氏寄贈	
74	芥川龍之介『傀儡師』	新潮社 大正8年(1919) 3版 芥川龍之介から武藤博士へのサイン入贈呈本	

75	斎藤茂吉『あらたま』	春陽堂 大正10年(1921) 斎藤茂吉から武藤博士へのサイン入贈呈本	
76	武藤長蔵宛斎藤茂吉書簡封筒		
77,78,79	武藤長蔵博士の名刺、印鑑、蔵書印	印鑑：外枠は「下り藤」で武藤家の家紋。中はChozo Mutoの頭文字CとMの組み合わせ文字になっている。蔵書印：外枠はローマ字でMUTOと記している。	
80	芥川龍之介・菊池寛が長崎を訪れたときの記念写真	大正8年(1919)5月、芥川龍之介は菊池寛とともに初めて長崎を訪れた。写真は長崎滞在中、芥川たちの世話をした素封家で文化人でもあった銅座町の永見徳太郎の屋敷の庭で撮影されたもの。左から菊池寛(31歳)、芥川龍之介(27歳)、武藤長蔵(38歳)、永見徳太郎(29歳)。	
81	斎藤茂吉との記念写真	大正6年(1917)12月に長崎医学専門学校教授として赴任した斎藤茂吉は、武藤博士より1歳年下で、ともに無類の本好きということもあり、非常に親しく行き来した。茂吉は大正10年(1921)に長崎を去ったが、二人の交流はその後も博士が亡くなる昭和17年(1942)まで続いた。写真は茂吉が長崎を去るにあたって博士と撮影した記念写真。写真の台紙に、「長崎を去るにのぞみ、三年の間なにくれとなく面倒を見て頂いた武藤長蔵君と共に写真をとるのは、僕の感謝の念を記念せむがためである。大正十年三月十四日長崎を去らんとし 斎藤茂吉誌す」との文が記されている。	